

二十五菩薩「来迎」について

伊藤 真宏

一、問題の所在

世に、「二十五菩薩来迎図」と呼ばれる来迎図がある。来迎図とは、阿弥陀仏と観音菩薩、勢至菩薩をはじめ、極楽にいる菩薩方が、念仏する衆生の臨終に際し、極楽からその人のもとにやってきて、観音菩薩の持つ蓮台に迎え摂られ、諸共に極楽に連れて行ってくれる様相を描写したものである。

二十五菩薩は来迎しない。「二十五菩薩」といえば、別に、一定の機能を有する。そのことを、今一度確認しておくことにも意義は認められよう。二十五菩薩の機能は何であり、来迎するのは誰であるか。そして「二十五菩薩来迎」とは、いつごろから呼ばれるのか、明らかにしてみたい。

二、来迎ということ

来迎についての根拠は、浄土三部経に展開される。

『無量寿経』には、阿弥陀仏の本願、第十九願に「設我得仏十方衆生発菩提心修諸功德至心発願欲生我國臨壽終時仮令不与大衆圍遶現其人前者不取正覺^①」とある。

また『観無量寿経』にはさまざまな形の来迎を挙げ、上品上生では「生彼國時。此人精進勇猛故。阿彌陀如来與觀世音及大勢至無數化佛百千比丘聲聞大衆無量諸天。七寶宮殿。觀世音菩薩執金剛臺。與大勢至菩薩至行者前。阿彌陀佛放大光明照行者身。與諸菩薩授手迎接。觀世音大勢至與無數菩薩。讚歎行者勸進其心。行者見已歡喜踊躍。自見其身乘金剛臺。隨從佛後。如禪指頌往生彼國生彼國已。」とあり、上品中生では「阿彌陀佛與觀世音及大勢至。無量大衆眷屬圍繞。持紫金臺至行者前讚言。法子。汝行大乘解第一義。是故我今來迎接汝。與千化佛一時授手。行者自見坐紫金臺。合掌叉手讚歎諸佛。如一念頃。即生彼國」、上品下生では「彼行者命欲終時。阿彌陀佛及觀世音并大勢至。與諸眷屬持金蓮華。化作五百化佛來迎此人。五百化佛一時授手。讚言。法子。汝今清淨發無上道心。我來迎汝。見此事時。即自見身坐金蓮花。坐已華合。」とある。

中品上生は「行者臨命終時。阿彌陀佛與諸比丘眷屬圍繞。放金色光至其所。演説苦空無常無我。讚歎出家得離衆苦。行者見已心大歡喜。自見己身坐蓮花臺」、中品中生は「如此行者命欲終時。見阿彌陀佛與諸眷屬放金色光。持七寶蓮花至行者前。行者自聞空中有聲。謂言。善男子。如汝善人。隨順三世諸佛教故。我來迎汝。行者自見坐蓮花上」とある。

下品上生には「爾時彼佛。即遣化佛化觀世音化大勢至。至行者前。讚言善哉善男子。汝稱佛名故諸罪消滅。我來迎汝。作是語已。行者即見化佛光明遍滿其室。見已歡喜即便命終。乘寶蓮花。隨化佛後生寶池中」、下品中生には「命欲終時。地獄衆火一時俱至。遇善知識以大慈悲。即爲讚說阿彌陀佛十力威德。廣讚彼佛光明神力。亦讚戒定慧解脫解脫見。此人聞已除八十億劫生死之罪。地獄猛火化爲涼風。吹諸天華。華上皆有化佛菩薩。迎接此人。如一

念頃。即得往生」、下品下生には「命終之時見金蓮花猶如日輪住其人前。如一念頃即得往生極樂世界。」とある。

『阿弥陀経』には「舍利弗。若有善男子善女人。聞説阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛與諸聖衆。現在其前。是人終時心不顛倒。即得往生阿彌陀佛極樂國土。舍利弗。我見是利故説此言。若有衆生聞是説者。應當發願生彼國土³」とあり、これらを根拠にして、念仏すれば来迎があることを衆生は期待するのである。

詳細に解釈してみると、『無量寿経』では、「もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功徳を修し、至心発願してわが国に生ぜん²と欲せんに、寿終のときに臨んで、もし大衆のために、圍繞せられてその人の前に現ぜずば、正覚を取らじ」とあって、「来迎引接の願」といわれ、往生を願う念仏の衆生の臨終に際しては、阿弥陀仏が極楽の聖衆に囲まれて念仏衆生の前に現れ、引き連れていつてくれるのである。一切の衆生を救済するという、崇高な法蔵菩薩の四十八の誓願が成就し、阿弥陀仏となっているから、第十九願も成就しているわけであり、これが根拠となつて、平生の念仏により、念仏者の臨終時に来迎があることが認められる。

『観無量寿経』では、上品上生で「かの国に生ずるとき、この人、精進勇猛なるがゆゑに、阿弥陀如来、観世音大勢至、無数の化仏、百千の比丘、声聞の大衆、無数の諸天、七宝の宮殿ともなり。観世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿弥陀仏は、大光明を放ちて行者の身を照らし、もろもろの菩薩とともにみ手を授けて迎接したまふ。観世音大勢至は、無数の菩薩とともに行者を讚歎して、その心を勧進す。行者見をはりて、歡喜踊躍し、みづからその身を見れば、金剛台に乗じて、仏の後に随従す。彈指のあひだのごときにかの国に往生す」とあり、阿弥陀仏が観音勢至菩薩と、無数の化仏や百千もの比丘や声聞、無数の諸天や七宝の宮殿とともに来迎することが分かり、観音菩薩の持つ金剛台に乗って衆生は往生する。

上品中生では「この行を行ずるものは、命終わらんと欲するとき、阿弥陀仏は觀世音、大勢至、無量の大衆と眷属に囲遶せられて、紫金台を持して、行者の前に至りたまひ、讚していはく、法子、なんじ大乘を行じて第一義を解す。このゆゑに、われいま来りてなんじを迎接す、と。千の化仏とともに一時に手を授けたまう。行者みずから見れば紫金台に座せり。合掌叉手して諸仏を讚歎したてまつる」とあり、阿弥陀仏が觀音勢至菩薩とともに、無量の大衆と眷属に囲まれて来迎し、紫金台に乗って往生する。

上品下生では「行者、命の終わらんと欲するとき、阿弥陀仏、觀世音大勢至、もろもろの眷属とともに金蓮華を持し、五百の化仏を化作して来たりて、この人を迎えたまう。五百の化仏、一時に手を授けて讚していはく、法子、なんじ、いま清淨にして無上道心を発す。われ来りてなんじを迎ふ、と。この事を見ると、すなはちみずから身を見れば金蓮華に座す」とあり、阿弥陀仏と觀音勢至菩薩が、もろもろの眷属と五百の化仏と来迎し、金蓮華に乗って往生する。

中品上生では「この善根をもつて回向して、西方極樂世界に生ぜん」と願求す。命終のときに臨んで、阿弥陀仏、もろもろの比丘とともに眷属に囲繞せられて、金色の光を放ちて、その人の所に至りて、苦、空、無常、無我を演説し、出家の衆苦を離るることを得ることを讚歎したまう。行者、見をはりて、心、大いに歡喜す。みづから己身を見れば蓮華台に座す。」とあり、阿弥陀仏がもろもろの比丘と、眷属に囲まれて来迎し、蓮華台に乗って往生する。

中品中生では「この功德をもつて、回向して極樂国に生ぜん」と願求す。戒香薰修するをもつて、かくのごときの行者、命終らんと欲するとき、阿弥陀仏もろもろの眷属とともに金色の光を放ち、七宝の蓮華を持して、行者の前に至りたまふを見る。行者みずから聞けば、空中に声あり、讚じていはく、善男子、なんじがごとき善人、三世諸

仏の教えに随順するがゆゑに、われ来りてなんじを迎ふ、と。行者みずから見れば、蓮華の上に座す。」とあつて、阿弥陀仏がもろもろの眷属と来迎し、七宝の蓮華に包まれて往生する。

下品上生では「そのときかの仏、すなはち化仏、化観世音、化大勢至を遣はして、行者の前に至らしめて、讚じていはく、善男子、なんじ仏名を称するがゆゑに諸罪消滅せり。われ来りて、なんじを迎ふ、と。この語をなしをはりたまふに、行者すなはち化仏の光明の、その室に遍満するを見る。見をはりて歓喜して、すなはち命終す。宝蓮華に乗じて、化仏の後に随ひて、宝池のなかに生ず。」とあつて、阿弥陀仏は、観音勢至菩薩の化身を来迎させ、衆生は宝蓮華に乗つて往生する。

下品中生では「命終らんと欲するとき、地獄の衆火、一時にともに至る。善知識の大慈悲をもつて、ために阿弥陀仏の十力威徳を説き、広くかの仏の光明神力を説き、また戒、定、慧、解脱、解脱知見を讚するに遇へり。この人、聞きをはりて八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火、化して清涼の風となつて、もろもろの天華を吹く。華の上にな化仏菩薩あつて、この人を迎接したまう。一念のあひだのごときに、すなはち往生を得。」とあつて、化仏と化菩薩が来迎する。

下品下生では「命終のとき金蓮華の、なほし日輪のごとく、その人の前に住することをみる。一念のあひだのごときに、すなはち極楽世界に往生することを得」とあつて、太陽のような金蓮華のみ衆生の前に来て、往生する。

『阿弥陀経』には「舍利弗、もし善男子善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心不乱なれば、その人命終のときに臨んで、阿弥陀仏、もろもろの聖衆とともに、現にその前にまします。この人終るとき、心顛倒せず、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。」とあつて、阿弥陀仏がもろもろの聖衆とともに来迎する

ことが述べられる。

以上、来迎が説き明かされる經典を見てきたが、念仏衆生を撰取するための来迎に、二十五菩薩ということばは一切出てこない。来迎するのは、そもそも本願で、阿弥陀仏が極樂の聖衆に囲まれて念仏衆生の前に現れるとなっており、また『阿弥陀經』でも「阿弥陀仏、もろもろの聖衆とともに現にその前にまします」とあって、この「聖衆」が、『觀經』上品上生では、「觀音勢至菩薩と、無数の化仏や百千もの比丘や声聞、無数の諸天や七宝の宮殿」に当たる。『觀經』では品位が下がるに従って、来迎のメンバーの数も少なくなり、下品では、阿弥陀仏が觀音勢至菩薩の化身を派遣、下品下生では金蓮華のみが来迎する。しかしいざれにしても、来迎ということは、「阿弥陀仏と極樂の聖衆」つまり「聖衆来迎」だということが判明する。

ちなみに、恵心僧都源信（九四二—一〇一七）は『往生要集』大文第二「欣求淨土」で淨土十樂を述べるが、その第一「聖衆来迎樂」で、「然者弥陀如来以本願故与諸菩薩百千比丘衆放大光明皓然在目前時大悲觀世音申百福莊嚴手擎宝蓮台至行者前大勢至菩薩与無量聖衆同時讚嘆授手引接是時行者目自見之心中歡喜身心安樂如入禪定当知草菴瞑目之間便是蓮台結跏之程即從弥陀仏後在菩薩衆中一念之頃得生西方極樂世界〔依觀經平等覺經并伝記等意〕」（弥陀如来、本願を以ての故に、諸の菩薩、百千の比丘衆とともに、大光明を放ちて、皓然として目前に在す。時に大悲觀世音は、百福莊嚴の手を申べ、宝蓮台を擎げて行者の前に至り、大勢至菩薩は、無量の聖衆とともに、同時に讚嘆し、手を授けて引接したまふ。是の時行者、目に自ら之を見て心中に歡喜し、身心安樂なること、禪定に入るがごとし。当に知るべし、草菴に目を瞑する間は、便ち蓮台に跏を結ぶの程なるを、即ち弥陀佛の後に従ひ、菩薩衆の中に在りて、一念の頃に西方の極樂世界に生ずること得ん。〔觀經・平等覺經、並びに伝記等の意に依る。〕⁽⁴⁾とあって、ここでも、無量の聖衆の来迎引接を述べていて、来迎するのは聖衆と認識していたことは、疑い

ない。

三、二十五菩薩とは

さて、では二十五菩薩とは何であろうか。源信は『往生要集』の大文第三「極楽証拠」の中で「十往生経云仏遺二十五菩薩常守護行人」(十往生経に云はく、佛、二十五菩薩を遣はして常に行人を守護せしむ⁵⁾)と述べ、大文第七「念仏利益」では「如是人輩縁是信敬我從今日常使前二十五菩薩護持是人常使是人無病無惱惡鬼惡神亦不中害亦不惱之亦不得便」(已上乃至睡寤行住所至之处皆悉安穩云云)唐土諸師云二十五菩薩擁護念阿弥陀仏願往生者「云云」此亦不違彼經意也「二十五菩薩者觀世音菩薩大勢至菩薩藥上菩薩普賢菩薩法自在菩薩師子吼菩薩陀羅尼菩薩虚空藏菩薩德藏菩薩寶藏菩薩金剛藏菩薩光明王菩薩山海慧菩薩華嚴王菩薩衆寶王菩薩月光王菩薩日照王菩薩三昧王菩薩自在王菩薩大威德王菩薩無辺身菩薩也」(是くのごとき人の輩は、是の信敬に縁つて、我、今日より常に前の二十五の菩薩をして是の人を護持せしめむ。常に是の人をして病無く悩み無からしめむ。惡鬼・惡神、亦中害せじ。亦之を悩まさず、亦便りを得じと「已上乃至、睡寤・行住・所至の処、皆悉く安穩ならむ、云云」。唐土の諸師の云はく、二十五の菩薩、阿弥陀佛を念じ、往生を願ふ者を擁護せむといへり「云云」。此亦彼の經の意に違はず。「二十五の菩薩とは、觀世音菩薩・大勢至菩薩・藥上菩薩・藥上菩薩・普賢菩薩・法自在菩薩・師子吼菩薩・陀羅尼菩薩・虚空藏菩薩・德藏菩薩・寶藏菩薩・金藏菩薩・金剛藏菩薩・光明王菩薩・山海慧菩薩・華嚴王菩薩・衆寶王菩薩・月光王菩薩・日照王菩薩・三昧王菩薩・定自在王菩薩・大自在王菩薩・白象王菩薩・大威德王菩薩・無辺身菩薩なり」と述べている。

源信の指摘通り、『十往生阿弥陀仏国經』には「若有如是等人我從今日常使二十五菩薩護持是人常令人無病無
 惱若人若非人不得其便行住坐臥無問晝夜常得安穩若有衆生深信是經念阿弥陀仏願往生者彼極樂世界阿弥陀仏即遣觀
 世音菩薩大勢至菩薩藥上菩薩藥上菩薩普賢菩薩法自在菩薩師子吼菩薩陀羅尼菩薩虚空藏菩薩德藏菩薩寶藏菩薩金藏
 菩薩金剛藏菩薩光明王菩薩山海慧菩薩華嚴王菩薩衆寶王菩薩月光王菩薩日照王菩薩三昧王菩薩定自在王菩薩大自在
 王菩薩白象王菩薩大威德王菩薩無辺身菩薩是二十五菩薩護行者若行若住若坐若臥若晝若夜一切処不令惡鬼惡
 神得其便也」(若し是の如き等の人有らば、我、今日より常に二十五菩薩、是の人を護持せしめ、常に是の人、無
 病無悩せしむ。若しは人、若しは人にあらずその便りを得ずとも、行住坐臥、晝夜を問わず常に安穩を得る。若し
 衆生有りて深くこの經を信じ阿弥陀仏を念じて往生を願ずれば、彼の極樂世界の阿弥陀仏、即ち觀世音菩薩大勢至
 菩薩藥上菩薩藥上菩薩普賢菩薩法自在菩薩師子吼菩薩陀羅尼菩薩虚空藏菩薩德藏菩薩寶藏菩薩金藏菩薩金剛藏菩薩
 光明王菩薩山海慧菩薩華嚴王菩薩衆寶王菩薩月光王菩薩日照王菩薩三昧王菩薩定自在王菩薩大自在王菩薩白象王菩
 薩大威德王菩薩無辺身菩薩を遣わす。是の二十五菩薩、行者を擁護し、若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥、
 晝夜一切の時、一切の処で、惡鬼惡神、その便りを得せしめざる也⁽⁷⁾とあつて、二十五菩薩は念仏行者を擁護し、
 行住坐臥二十四時間、どこであつても、惡鬼惡神からの関わりから断絶させる、ということが分かる。

中国浄土教の祖、善導(六一三—六八一)は『往生礼讃』で、「問曰。稱念禮觀阿彌陀佛。現世有何功德利益。
 答曰。若稱阿彌陀佛一聲。即能除滅八十億劫生死重罪。禮念已下亦如是。十往生經云。若有衆生。念阿彌陀佛願往
 生者。彼佛即遣二十五菩薩擁護行者。若行若坐。若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令惡鬼惡神得其便也。又
 如觀經云。若稱禮念阿彌陀佛。願往生彼國者。彼佛即遣無數化佛無數化觀音勢至菩薩護念行者。復與前二十五菩薩
 等。百重千重圍遶行者。不問行住坐臥一切時處若晝若夜。常不離行者。今既有斯勝益。可憑。願諸行者各須至心求

往。(問ひて曰はく、阿弥陀佛を称念し礼観して、現世に何の功德利益か有る。答へて曰はく、若し阿弥陀佛を称すること一声するに、即ち能く八十億劫の生死の重罪を除滅す。礼念已下も亦是くのごとし。十往生経に云はく、若し衆生有りて阿弥陀佛を念じて往生せむと願ずれば、彼の佛即ち二十五の菩薩を遣はして、行者を擁護せしめたまふ。若しは行、若しは坐、若しは住、若しは臥、若しは昼、若しは夜、一切時一切処に、悪鬼・悪神をして其の便を得しめずと。又観経に云ふがごとし。若し阿弥陀佛を称礼念して、彼の国に往生せむと願ずれば、彼の佛即ち無数の化佛、無数の化観音・勢至菩薩を遣はして、行者を護念せしめたまふと。復前の二十五菩薩等と百千重行者を囲遶して、行住坐臥、一切の時処を問はず、若しは昼、若しは夜、常に行者を離れたまはず。今既に斯の勝益有す、憑むべし。願はくは諸の行者、各須く心を至して往くことを求むべし。』⁽⁸⁾とし、『観念法門』『法事讃』でも同様に引用している。⁽⁹⁾善導も、二十五菩薩と言えば、念仏行者を擁護するというように認識している。

法然(一一三三―一二二二)は、その教義書、『選択本願念仏集』第十五章私釈段において、善導『往生礼讃』を引用して、『十往生阿弥陀仏国経』所説の二十五菩薩を捉えている。即ち、「私問曰唯六方如来護念行者如何答曰不限六方如来弥陀観音等亦来護念故往生礼讃云十往生経云若有衆生念阿弥陀仏願往生者彼仏即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若臥若昼若夜一切時一切処不令悪神得其便也又如観経云若称礼念阿弥陀仏願往生彼国者彼仏即遣無数化仏無数化観音勢至菩薩護念行者復与前二十五菩薩等百千重囲遶行者不問行住坐臥一切時処若昼若夜常不離行者今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往」(「私に問ひて曰はく、唯六方の如来のみ有して行者を護念したまふは如何ぞ。答へて曰はく、六方の如来のみには限らず。弥陀・観音等亦来りて護念したまふ。故に往生礼讃に云はく、十往生経に云はく、若し衆生有りて阿弥陀佛を念じて往生を願ずれば、彼の佛即ち二十五の菩薩を遣はして、行者を擁護したまふ。若しは行若しは坐、若しは住若しは臥、若しは昼若しは夜、一切の時一切の処に、悪神をし

て其の便りを得しめずと。又觀經に云ふがごとし。若し阿弥陀佛を称礼念して、彼の国に往生せむと願ずれば、彼の佛即ち無数の化佛、無数の化觀音・勢至菩薩を遣はして、行者を護念したまふ。復前の二十五の菩薩等と百重千重行者を困遶して、行住坐臥を問はず、一切の時処に、若しは昼若しは夜、常に行者を離れたまはず。今既に斯の勝益有り。憑むべし。願はくは諸の行者、各須く至心に往くことを求むべし。」とある。法然も、二十五菩薩といった場合には、念仏の行者を擁護するという認識であることは疑いない。

これらのように源信の認識では、『十往生阿弥陀仏国經』を根拠に、二十五菩薩は念仏者を擁護する、ということであり、先に述べた、来迎するのは聖衆であるということとは全く区別していることが判明した。また善導を受けて法然も、二十五菩薩、という場合の機能は、嚴密に区別していることとは言えるであろう。

つまり、法然に至るまで、来迎するのは聖衆であり、二十五菩薩は念仏行者を擁護する、と区別していることが嚴然であり、二十五菩薩は来迎しない、と云ってよいであろう。ただし、法然は、それと同時に私積で、『觀無量壽經』下品上生における化仏化菩薩の来迎を説き明かすところで、臨終時に来迎の化仏化菩薩が、二十五菩薩とともに念仏行者を幾重にも取り囲むことを「勝益」と規定し、来迎の聖衆と二十五菩薩が同時に念仏行者に付き従つていくことも述べていることには注意しなければならない。

四、むすび

さて、二十五菩薩はいつごろから来迎するようになったのであろう。

法然の少し前の時代の文献である『榮花物語』^[1]には、聖衆来迎についてが数か所と二十五菩薩の念仏行者擁護が

一か所記述されるが、これもしつかり区別されている。法然の少し後の時代の文献である『平家物語』¹³には、随所に阿弥陀仏の来迎の記述がみられるが、いずれも聖衆来迎を指し、二十五菩薩来迎を述べてはいない。これまでのところ、鎌倉時代の文献で二十五菩薩が来迎するという文脈のものは寡聞にして出会えていない。しかし、『平家物語』の記述を勘案すれば、法然以後、少なくとも十三世紀中には継続して意識されたと思われる。

その後、つまり一三〇〇年代に入ってから以降、聖衆来迎と二十五菩薩の念仏行者擁護が混同されてくるのではなからうか。今後も、この問題を追究し続けていくつもりであるが、前述に指摘した如く、法然は、私積で、臨終時に来迎の化仏化菩薩が、二十五菩薩とともに念仏行者を幾重にも取り囲むことを「勝益」と規定し、来迎の聖衆と二十五菩薩が同時に念仏行者に付き従っていくと述べていることは、二十五菩薩来迎への起点となっている可能性として指摘しておきたい。

註

- (1) 浄土宗全書一―七―上十五
- (2) 浄土宗全書一―四十六―上十三
- (3) 浄土宗全書一―五十四―上一
- (4) 浄土宗全書十五―五十四―下八
- (5) 浄土宗全書十五―六十七―上五
- (6) 浄土宗全書十五―一二一―下十七
- (7) 卍続蔵経八十七―五八三

- (8) 浄土宗全書四―三七五―下十三)
- (9) 『観念法門』 浄土宗全書四―二二九―上三)
- 『法事讃』 浄土宗全書四―二―上六
- (10) 浄土宗全書七―六十七)
- (11) 『栄花物語』は、六国史の後に位置付けられる歴史書で、鏡物などの歴史物語の先駆けになったといわれる。女性の手で作成されたと考えられているが、詳細は不明。『源氏物語』の影響も指摘され、歴史書と文学書を融合させた画期的なものとの評価で知られる。宇陀天皇から堀河天皇までを扱い、八九〇年前後から一〇九二年までの約二百年の記述は、ちょうど源信(九四二―一〇一七)の生存年代が含まれる。その時代の意識が反映していることを考慮すれば、やはり法然までの時代は間違いなく、聖衆来迎と二十五菩薩の念仏行者擁護が区別されている。
- (12) 日本古典文学大系(岩波書店)や、岩波文庫本、新編日本古典文学全集(小学館)三十一―三十三に収録されている。新編日本古典文学全集三十二―二八八「阿弥陀仏と念じたてまつる人をば、二十五菩薩もまもりたまふなり」と、唐の大師のたまへり。」
- (13) 『平家物語』の成立は不詳であるが、一二四〇年以前と考えられている。源平の争いと、一一八五年に壇ノ浦に滅した平氏の栄枯盛衰を描き、法然の生涯はその栄光盛衰とともにしている。いづれにしても、法然寂後それほどの時を経ずして、『平家物語』は成立している。そこにその時代の意識が反映しているであろう。